

書 評

青山和佳. 『貧困の民族誌：フィリピン・ダバオ市のサマの生活』東京大学出版会, 2006 年, 414p.+xi.

玉置泰明*

本書は、開発経済学者・青山和佳氏によるミンダナオ島ダバオ市のスラムに住む少数民族サマの民族誌である。本書の大半は書き下ろしだが、原型となったのは著者が 2002 年に東京大学大学院経済学研究科に提出した博士論文「ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程—経済的生活水準とエスニック・アイデンティティの観点から」であり、同論文は 2003 年に「第 2 回井植記念アジア太平洋研究賞」を受賞している。

まず本書の概要を示す。「はじめに」では、本書の目的、方法論を規定する。本書はサマを事例として経済的貧困を人々の暮らしとの関連において捉える試みである。分析の鍵概念として開発経済学では看過されてきた「エスニック・アイデンティティ」を取り上げることで「開発経済学における一国的な思考の枠組みを省みる必要性を訴えたい」(p.2)、「もうひとつの意図は、貧困者を個別社会の価値観や文化を担った主体としてとらえることの必要性を訴えることだ」(p.5) という。貧困者を主体的存在として捉えた A・センの問題意識を念頭におきつつ、貧困の実態的理

解のため人類学に目を向け、エダーの「適応」概念を援用する。

第 I 部「現代サマの「貧困」：二重に周縁化された人びと」は、地域の歴史、社会的状況の中にサマを位置づける。第 1 章「誰が誰を「バジャウ」と呼んできたのか：他民族との関係、国家との関係について」では、サマの他称、自称としてのバジャウという概念が分析される。バジャウ＝漂海民というイメージが定着しているが、実態は多様化しており実体的定義は不可能である。著者は、他民族および国家との関係において歴史的に構築されたものとしてのバジャウ・アイデンティティを検討した。第 2 章「貧困層としてのバジャウ：ダバオ市のサマ I」では、バジャウと他の 4 民族が混住するスラムでの世帯悉皆調査の結果が示される。生活水準指標のすべてにおいてバジャウが社会、経済的に低い地位にあること、非バジャウがバジャウに対して蔑視的イメージをもつことが確認された。第 3 章「豊かなサマ、貧しいサマ：ダバオ市のサマ II」では、サマ内部の差異が示される。住民 20 人の社会的地位序列についての主観的評価の結果、社会的地位の高い順に、1) 男子：貝殻真珠販売業（於ホテル）、女子：主婦か非漁業、2) 男子：貝殻真珠販売業（於ホテル・行商）、女子：古着行商、3) 男子：貝殻真珠販売業（対貨物船・行商）、女子：主婦か古着行商、4) 男子：漁業（籠漁、延縄漁）、女子：古着行商、物乞い、5) 男子：漁業（突き漁）、女子：物乞い、という 5 つの生業グループが抽出された。

第 II 部「「貧困」を生きる：バジャウとし

* 静岡県立大学国際関係学部

て、サマとして」では、5 グループから各 1 世帯をとりあげて生活実態を詳述する。第 4 章「サマがバジャウを名乗るとき」では、既存の漂海民研究からアイデンティティのモデルの適用妥当性を検討し、世帯を分析単位とする意味を論ずる。5 グループの比較の分析から、政治、経済的交換場面でのバジャウ・アイデンティティ、信仰場面でのサマ・アイデンティティの強調という概括を行なう。第 5 章「グワポの家族：商売と信仰と教育」では、社会的序列最上位グループの家族をとりあげる。サマの集住地区ではなく、他民族との混住地区に住む。真珠販売業で安定した収入を得、栄養、資産、教育などすべてで他のサマを引き離す。出自は陸サマだが、一族の他民族との婚姻が進んでいる。宗教、社会儀礼において一族の結集性が強い。他のバジャウと同一視されることを嫌うが、商売ではバジャウ・イメージを利用する。第 6 章「ピライアの家族：古着を売る母と娘たちの祈り」は第 2 グループの家族である。夫は無職（元漁師）で、妻と娘の古着行商で家計を支える。食事も日々の稼ぎに依存するが、勤勉で飢えることはない。グループ内でも助け合う。夫婦とも非識字で子どもたちもほとんど学校に行っていない。出自は陸サマでサマ・アイデンティティをもつが、援助にはバジャウとして応じる。第 7 章「パパ・メルシート

の家族：窮乏化と揺れる祖霊信仰」は、第 3 グループである。家船で暮らす海サマであった。その後も移動しながら漁を行なってきたが、ダバオでは生業がなく困窮化した。夫婦は月の半分ほど近隣都市で物乞いをする。子

や孫たちも何らかの仕事で家計に貢献するが、援助や店のつけ買いなしでは暮らしていない。教育もほとんど受けていない。グループ内で近年キリスト教化が進み、教会をとおして政府や NGO の援助を受けている。自称はつねにサマだが、物乞いなどで自虐的にバジャウを名乗る。第 8 章「カルマンの家族：神の加護を信じて海に生きる」は、第 4 グループである。代々の漁師だが、ダバオ移住後の漁の低迷で、妻たちが古着行商で家計に貢献する。収入は不十分で食事も不安定。一族でも、漁が不調だと老人や女、子どもが物乞いをする。一族全員非識字。伝統的宗教を中心としたグループの精神的サポートは強いが、他のグループとの経済的、社会、宗教的関係はほとんどない。政府など外部との関係も希薄で援助も受けない。サマ・アイデンティティをもつが、家船経験者と自らを区別する。バジャウを自称することもあるが戦略性はない。第 9 章「マグサハヤの家族：物乞いとして陸を漂泊する」は、最下位グループである。家船生活をしていた海サマで、男の多くは突き漁をしていたが、ダバオでは漁ができなくなり物乞いをしている。グループの誰でも、時に長期間物乞いや行商のため移動をする。全員非識字。食事は不安定で飢えることもある。グループの相互扶助は弱く、宗教的機能も弱体化した。政府、市場とのつながりは弱く他グループともほとんど経済的関係はないが、同じ海サマの第 3 グループには親近感をもつ。「弱者としてのバジャウ」を訴えることで生きている。第 10 章「クリスチャン・バジャウとして新しく生きる？」

は、近年のキリスト教受容を論じる。海サマの牧師が布教を始め、まず第3グループが受容し、第5グループを巻き込んでいった。牧師をとおして援助などの外部資源の導入がなされ、物質的恩恵やコミュニティの精神的機能の復活がみられた一方、格差の増大や牧師へのパワーの集中による他の信徒との確執もおこった。キリスト教受容の過程で自尊心を伴う新たなバジャウ・アイデンティティの覚醒がみられたが、政府や他民族との力関係に構造的変化をもたらすものではなかった。「おわりに」では、5グループのエスニック・アイデンティティの動態をまとめらうと、分析結果から得られる含意が述べられる。

本書はサマ（バジャウ）民族誌への重要な貢献である。多様な生活実態の記述をとおして、貧困とエスニック・アイデンティティの相互関連を実証するという著者の意図は十分達成されている。そもそも研究対象の選定からして、難しい挑戦であった。本書のサマはすでに伝統文化をほぼ失っているし、大規模災害や開発などエスニック・アイデンティティの覚醒に結びつくような劇的なできごとは何もない。「淡々と日常生活を送るなかで」（p.12）のエスニック・アイデンティティの動態を記述したことが民族誌としての普遍性を高めている。また、本書の事例は、固有文化の消失がエスニック・アイデンティティの喪失につながるという論への反証となっているし、従来の「漂海民の陸上り＝定着」という図式への反証（陸上り後も移動性を保持）として、漂海民の陸上適応の研究にも新たな貢献をなしたといえる。

本書の意義のひとつは、貧困状況への「適応」だけでなく「適応困難」も描いていることだろう。著者は、既存研究では「受動的な弱者としてのマイノリティを描く「進歩の犠牲者」モデルを暗に避けようとするあまりなのか、（中略）サマが変化の波に対して適応困難を経験する様子はあまり出てこない」（p.40）と指摘する。近年の人類学は本質主義的文化理解を批判するが、犠牲者モデル（消滅の語り）を避けて主体的適応を強調するあまり、かえって本質主義的適応理解に陥っていないか、という人類学批判にもなっているのである。

著者は言及していないが、本書の読者の多くは O. ルイスの『貧困の文化』を連想するのではないだろうか。5 家族をとりあげているところまで符号している。本書の事例を読めば、たしかにルイスの「貧困の文化」との共通性をいくつか見出すことは可能だろう（離婚の多さとか、スラムコミュニティのインフォーマルなネットワークとか）。しかし本書は「貧困の民族誌」であって「貧困の文化」の研究ではない。むしろサマの生活実態を「貧困の文化」といった包括的概念で説明することを拒否することで、動態的記述に成功したといえる。

安易な文化的説明を避けていることが本書の成功の一因だが、他方で文化的説明を求めたくなる部分もある。たとえば物乞いは、本書でも貧困、他の生業を選べないことによるやむを得ぬ選択として描かれているが、こうした条件の存在と物乞いの実行とのあいだには大きな飛躍があるはずである。同程度に貧

困であっても物乞いに踏み切るか否かには、個人的な決断をこえた要因が予想される。この点に関して拙論の引用に問題がある。「貧困層としてのバジャウのステレオタイプは（中略）先住民アエタのあいだでさえできあがっていた [玉置 2000: 127]」（p.41）としているが、アエタのもつステレオタイプは「物乞いとしてのバジャウ」であって単なる「貧困層」ではない。アエタは「自分たちはいかに貧困でも物乞いはしない」という言い方でバジャウと差異化する。物乞いが民族的差異の指標となっているのである。著者は将来の研究として、慈善行為や自尊心などのテーマを深めたいとしている（p.326）。まさにそれが「文化としての物乞い」を考える手がかりになるだろう。物乞いの戦略やジェンダーの問題を含めた「物乞いの民族誌」も期待したいところである。

評者には本書を開発経済学として専門的に評価する能力はないが、やはり本書の原型が開発経済学の博士論文であるということの意義は大きい。かつて人類学者ヒルが開発経済学批判として、途上国経済、社会内部のさまざまな多様性を無視した「誤った一般化」という総括を行なったが [Hill 1986]、本書のような研究を無視した開発経済学批判は、いまや「誤った一般化」のそしりを逃れないだろう。ただし、フィールドワークに基づく開発経済学の研究ということでは、著者の指導教官である中西徹がマニラのスラムで研究を行なったし [中西 1991]、中西の師・高橋彰は 1960 年代にすでに中部ルソン農村での調査に基づく先駆的研究を行なっている [高橋

1965]。本書では中西の研究が脚注的に言及されているだけで、詳しく論じられてはいない。「文献渉猟とそれに基づく論考が不徹底になってしまった」（p.325）というが、文献渉猟以前に大きな影響を与えたはずの師の研究にほとんど言及しないのは、本書で唯一解せない点である。しかし、中西の調査が「社会学的」であるのに対し本書は「人類学的」であるといえる。その対比は、たとえば対象住民の類型化に現れる。中西は所得という経済学的指標（エティック）によってスラム住民を分類しているが、本書では住民の主観評価というエミックの視点を採用している。そしてそのエミックの扱い方が、民族誌への方法論的貢献となっている。主観的評価の結果 13 人が個人よりカンボン毎の評価をした。著者はその場合のカンボンの最大数 5 をとって代表とされる各 1 世帯を訪問し、自分たちのグループに属するとみなす世帯を選んでもらう。それを 20 人の評価からの世帯の順位分布と照らして 5 グループとした（p.87）。主観調査から恣意性を排する姿勢は、やはり経済学者としての厳密性への拘りによるものだろう。一部の人の語りをそのまま集団全体のエミックとしてしまう人類学者も少なくないなか、著者の態度には学ぶべき点がある。

他方、本書が開発経済学に新しい理論的貢献をしたとはいいいくいだらう。また「分析結果からの含意」が貧困に関して従来看過されてきた側面を指摘し、援助政策への提言の含みももつものの、具体的政策提言が論じられているわけではない。それが開発経済学としては弱点といえるかも知れない。もちろん

それは著者も十分承知していることであるが、その一因が本書の視点が著者の意識以上に人類学的になっていることにもあるのではないかと思われる。著者は「人類学的研究であれば（中略）人びとが「在地の論理」に基づいてとる「主体的反応」にこだわり、地域の文脈に沿って微細な視点から世界を読み解こうとするだろう（中略）。だが本書では、むしろ「在地の論理」と「よそ者」（中略）との認識のずれや援助にともなう外部からの資源投入が、人びとの暮らしぶりをどのように変化させたのか、という点に課題を絞りたい」（p.290）として、人類学との差異を強調している。しかし著者の重視した課題も最近の人類学の重要課題といえる。長年イヌイットの研究をしてきた岸上伸啓は、都市イヌイットのコミュニティ形成運動に積極的に関与する中で「人類学とは何か」という疑問に突き当たり、「人類学的実践が、内部の視点と外部の視点とを併用しつつ微視的な視点からほかの人々の多様な生き方を長期の現地調査に基づいて理解し、記述することであることを強調しつつも、その実践そのものや調査結果の援用が現地の人々の生活を変化させる可能性があることを指摘した」[岸上2006: 520]。この岸上の人類学者としての自問は、本書の著者の開発経済学者としての悩みに通底するだろう。内と外の認識のずれを深く知ってしまった著者は、安易に理論化や政策提言ができない、あるいはすることを躊躇せざるを得ないのではないか。そうした悩み、ジレンマを突き抜けて理論化や提言が生まれたとき、著者の新しい開発経済学への貢

献がなされるだろう。

そもそも本書を人類学と経済学にわけて評価することは有益でない。本書が領域をこえて多くの読者に読まれることを願って筆をおきたい。

引用文献

- 岸上伸啓. 2006. 「都市イヌイットのコミュニティ形成運動—人類学的実践の限界と可能性」『文化人類学』70 (4): 505-527.
- 高橋 彰. 1965. 『中部ルソンの米作農村：カトリナン村の社会経済構造』アジア経済研究所.
- 玉置泰明. 2000. 「都市先住民の生存戦略—フィリピン・ルソン島南部アエタ (Acta) の薬売り」『静岡県立大学国際関係学部紀要』13: 109-130.
- 中西 徹. 1991. 『スラムの経済学：フィリピンにおける都市インフォーマル部門』東京大学出版会.
- ルイス, オスカー. 2003. 『貧困の文化—メキシコの〈5つの家族〉』高山智博・染谷臣道・宮本勝訳, 筑摩書房.
- Hill, P. 1986. *Development Economy on Trial: The Anthropological Case for Prosecution*. Cambridge: Cambridge University Press.

Itaru Ohta and Yntiso D. Gebre eds.
Displacement Risks in Africa: Refugees, Resettlers, and Their Host Population. Kyoto: Kyoto University Press and Melbourne: Trans Pacific Press, 2005, 394 p. + xv.

MAMO Hebo*

Displacement Risks in Africa is an outcome

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

of an international symposium held in Kyoto, Japan in November 2003. The symposium was organized by the Center for African Area Studies at Kyoto University and the COE (Center of Excellence) Program, “Making Regions: Proto Areas, Transformations and New Formations in Asia and Africa.” Displacement is one of the pressing problems Africa has been facing as the continent shares a disproportionate number of displaced peoples in the world. Displacement, thus, appears as a central concept of this volume. Risk is another central concept associated with displacements as being reflected virtually in all the chapters in the volume. The volume begins with a well-organized introduction in which the editors thoroughly discussed ‘conceptual’ issues of displacement risks. The eleven chapters in the volume are organized into three parts: ‘Refugees and Reintegration of Returnees,’ ‘Development-and-Conservation-Induced Displacements,’ and ‘Implication of In-migration for Host Populations.’

Chapter 1, ‘*No Solution in Sight: The Problem of Protracted Refugee Situations in Africa*’ by Jeff Crisp maintains that refugee situations in Africa have been protracted because of intricate vested interests of the various actors, and these vested interests have contributed either to the persistence of the conflicts that forced refugees to flee their countries of origin or slowed down their re-settlement and repatriation. Crisp argues that

different actors—donor agencies and refugee hosting countries as well—have contributed to the protracted refugee situations by focusing on repatriation of the refugees instead of integrating them in countries of asylum. Crisp suggest that international community and African states must give attention to ending conflicts that forced refugees to flee their countries of origin; promote voluntary repatriation, and explore alternative solution (integrating refugees into countries of asylum, for instance) and promote self-reliance of the refugees pending return, in order to deal with the protracted refugee situations in Africa.

Chapter 2, ‘*Coping with Displacement: Social Networking among Urban Refugees in an East African Context*’ by Roos Willems discusses how the refugees and other forced migrants from the Great Lakes region employed social networks as coping strategies in Dar es Salaam, Tanzania. Willems reveals that discouraged by insecurity and poor health and living conditions in the refugee camps run by international organizations, increasing number of refugees made their ways to urban centers. Refugees made these decisions while they knew that international assistance is hardly obtainable in urban areas, and that they needed to ‘fend for themselves.’ Willems also reveals diverging views and misunderstandings between urban refugees and UNHCR officials in that, while refugees and asylum seekers predominantly

need the UN organization to provide them with protection and help them legally stay in Tanzania, UNHCR tends to perceive urban refugees as demanding and expensive to handle. Willems' analysis mainly focuses on the importance of social networking—outside of both international organization and asylum countries—for the survival and success of the urban refugees and asylum seekers.

In Chapter 3, *'The Uncertainties of the Child Soldier: Experiences and Subsequent Reintegration into Civil Societies,'* Art Hansen focuses on the integration of child soldiers into civil societies after the end of conflicts. Hansen begins his paper with conceptual discussions of 'civil' and 'military' societies. Hansen then argues that induced by war and conflicts, African societies are fragmented into civil and military societies, and these societies have different values and norms on which socialization and other forms of enculturation are based. These differences would have consequences in the process of reintegrating child soldiers into civil societies after the cessation of hostilities. Hansen discusses war time experiences of child soldiers and their post-conflict integration, and uncertainties that confront the communities into which child soldiers are to be integrated.

Chapter 4, *'Belonging, Displacement, and Repatriation of Refugees: Reflections on the Experiences of Eritrean Returnees,'* by Gaim Kibreab discusses Eritrean returnees' decision

either to return to their village of origin in Eritrea or somewhere else in the country or to stay on in a host country. Kibreab puts his discussion in the framework of two contending theories of belonging or the relationship between people and particular places: the theory of nationalism and liberal theories. Kibreab argues that belonging and places have no intrinsic value of themselves but instruments to fulfill a goal. Kibreab tends to put much emphasis on the social capital that people had built in refugee camps as a major factor that affects their decision on the place of return. Nevertheless, the case of Eritrean returnees couldn't tell us if there were some political forces that influenced returnees' decisions or if ecological and economic factors (absence or presence of land, for instance) influenced the decisions of the returnees, or if the returnees may later on look for a space in their place of origin once they established themselves somewhere else (for comparison see the case of Rwanda returnees in Chapter 5 of this volume).

In Chapter 5, *'Returnees in Their Homes: Land Problems in Rwanda after the Civil War,'* Shin'ichi Takeuchi and Jean Marara deal with the complexities involved in land acquisitions, and conflicts overland that followed the massive return of refugees after the end of a conflict that devastated Rwanda. Takeuchi and Marara based their discussion on comparative studies of two systematically

selected regions of Rwanda and focus on two cases of returnees: ‘Old Case returnees’ and ‘New Case returnees’—the former refer to those who fled the country in 1960s and the later refer to those who flee Rwanda in the mid-1990—and the interaction between the two categories. The interaction between the two categories of refugees was shaped around the land problem. The authors bring into fore the role of the government (or political actors) in channeling the interaction between the two categories of returnees. Takeuchi and Marara doubt about the stability of land rights obtained (by Old Case returnees) through political regime arguing that these rights are susceptible to inherent instability of the political regime. The authors also reveal that although ‘Old Case returnees’ initially returned and received land in the areas suggested by the government, they later on began to return to their place of origin and claimed land there too (p.183, compare with Kibreab’s arguments in Chapter 4).

In Chapter 6, ‘*Concept and Method: Applying the IRR Model in Africa to Resettlement and Poverty*,’ Michael M. Cernea deals with the IRR (Impoverishment Risks and Reconstruction) model, which he has developed to outline major social risks in forced displacement and ‘ways for counteracting them.’ Cernea’s analysis focuses on the studies that have successfully employed the IRR model in a various aspects

of displacement. Cernea argues that what his analysis unquestionably reveals is the link between forced displacements and the creation of ‘New Poverty.’ Cernea employs concepts of ‘Old Poverty’ and ‘New Poverty’ in the view that paradoxically, programs meant to bring about development (deal with ‘Old Poverty’) breed ‘New Poverty’ when they cause displacement—which exposes the displaced to the various impoverishment risks. Cernea alludes in his discussions that the IRR model, if properly used, could help avoid the creation of new poverty as it can help predict risks that displacement and resettlement programs would entail. Beyond its predictive value, Cernea maintains, the IRR model has diagnostic, problem solving and methodological functions.

Chapter 7, ‘*Some Socio-Economic Risks and Opportunities Relating to Dam-Induced Resettlement in Africa*,’ by Chris de Wet presents a summary of the various Dam-induced resettlement schemes from across Africa. He focuses on various kinds of risks and opportunities associated with Dam-induced resettlements, and argues that the success of resettlement projects be evaluated not merely in terms of its stated goals but by the latent opportunities such schemes may create—the opportunities that may result from the abilities of entrepreneurial members of both the resettlers and the host populations (pp.270-271). He maintains that

resettlement processes and the resettlers socio-cultural settings are inherently complex. As a result of this complexity, rigid and inflexible resettlement plans are risks-prone. Chris de Wet calls for an open-ended, dynamic, flexible and participatory approach in the processes of planning and implementing the resettlement schemes in order to deal with the complexities involved and promote resettlers' chances for a better adaptation.

In Chapter 8, *'The Environmental Risks of Conservation Related Displacements in Central Africa,'* Kai Schmidt-Soltau discusses nature conservation-induced displacements in Central Africa region. Schmidt-Soltau examines the various risks associated with the creation of conservation parks in the frame work of the IRR model and stresses that the hunter-gather communities who live in this region were not simply displaced but 'expelled' from their land. His arguments allude to a basic but fundamental question—conservation for whose sake or who benefits from the conservation efforts? Schmidt-Soltau argues that all the supposedly beneficiaries gained nothing, that the already abysmal poverty worsened (p.295), and resettlement processes contributed to the degradation of the ecosystems instead of conserving it (p.301).

In Chapter 9, *'Multiple Socio-Economic Relationships Improved between the Turkana and Refugees in Kakuma Area, Northwestern Kenya,'* Itaru Ohta examines, from the

'insider's' points of view, the interaction between the refugees (mainly of South Sudan origin) and their host—the pastoral Turkana of Northwestern Kenya. Ohta reveals that after some difficulties and uneasy relationship between the refugees and the Turkana during the earlier stage of refugees' arrival, the two groups eventually engaged in intermarriage, bond-friendship, and economic exchanges. Contrary to a general perception of the relationships between the refugees/settlers and their host population as heightened and conflict ridden, Ohta offers a new insight on the positive interaction between the refugees and the local population. He presents how the host community strategically made use of the presence of their 'guest population,' notwithstanding some fatal incidents and environmental problems exacerbated by the presences of a massive refugee population.

Chapter 10 by Eisei Kurimoto, *'Multi-dimensional Impact of Refugees and Settlers in the Gambela Region, Western Ethiopia,'* takes up that case of the Anywaa community in Gambela who were squeezed in between the expanding Nuer, the government-induced massive resettlement, and the war-induced refugees influx from South Sudan. Kurimoto outlines and discusses the environmental, economic, and political devastation and the heightened security in which the Anywaa found themselves. Kurimoto puts his discussion in a wider arena—political

instabilities and conflicts in Ethiopia and the Sudan—that further complicated the already delicate relations between the refugees/resettlers and the host population. Kurimoto outlines some fundamental factors that contributed to the scale of devastation: that the host population was neither consulted nor did they consented to the resettlers/refugees presence, that the number of refugees/resettlers was massive to the hosts, that refugees/resettlers were given a better privilege by the government and international organizations than the host, and that no forum was created for the refugees/resettlers to discuss and solve their problems with their hosts.

The final chapter by Yntiso D. Gebre, '*Promises and Predicaments of Resettlement in Ethiopia*' focuses on Metekel resettlement in Northwestern Ethiopia and argues that the IRR model developed for the assessment of development-induced displacement could equally be useful to understand the risks to which the host populations are exposed. Subsequently, Gebre employs the model in a comparative perspective and outlines the risks to which both the resettlers and the host population were exposed, and adds the risk of insecurity or increased conflict to the tally of the risks developed by Cernea (Chapter 6). Gebre also compares the resettlement schemes of the 1980s to the current resettlement processes in Ethiopia. He argues that although

there have been some improvements in the manner the government is conducting the resettlement, there still persist the ambitious nature of the scheme and lack of feasibility studies of the scheme. Gebre calls for a more cautious approach in conducting resettlement. He stresses on the importance of conducting up to the standard feasibility studies and the need to deal with a reasonable number of people at a time instead of relocating massive population.

Displacement Risks in Africa provides a one-stop venue for displacement studies as it presents comprehensive resources on conceptual/analytical issues, provides case studies that encompass various forms of displacement, and brings into fore the effect of displacement on host communities, and the multidimensional interaction between the hosts and the refugees/resettlers. This volume deals with issues of urgency. It takes displacement as a central concept to reveal the gravity of the problem in Africa. It also discloses that the powerless (both economically and politically) are predisposed, to a larger extent, to the displacement risks, either as relocatees to make ways for development and conservation projects, or as hosts (their land being selected for resettlement sites or refugee camps), thereby disproportionately sharing risks of dispossessions and impoverishments. Powerlessness, thus, appears to be not

merely a risk but a fact that exposes the powerless to further risks. These powerless groups include ethnic minorities, the poor indigenous communities and marginalized pastoralists. Thoughtful studies presented in the volume appeal to the African governments and international organization not merely to have in place realistic plans and policy guidelines but also to follow them in the courses of resettlements schemes. This would help ease the creation of ‘new poverty,’ improve security, and reduce a number of impoverishment risks.

Ian Scoones. *Science, Agriculture and the Politics of Policy: The Case of Biotechnology in India*. New Delhi: Orient Longman Private Limited, 2006, 417p.

秋山晶子*

1. はじめに

遺伝子組み換え農作物は、貧困者の救世主となれるのか。バイオテクノロジー、特に遺伝子組み換え農作物（以下 GMO）は、先端科学技術による持続可能な農業といううたい文句とともに、1990 年代のインドに導入された。本書は、自然環境および人体への悪影響といった不安定要素と、「最新の科学技術による明るい未来」という標語を併せもつこ

の科学技術を具体的な空間設定の中で徹底検証することを目的としている。舞台は、現代インド社会。特に情報技術産業（以下 IT 産業）と、それに続くバイオテクノロジー産業の発達で一躍有名になったバンガロールである。また分析方法としては、GMO の技術論を回避し、バンガロールを中心とした 300 件以上の聞き取り調査に依拠した社会科学的な実証研究をとる。

政策決定の場で GMO が、人々の語り、利害関係者の動向、政策力学の構造にいかにか影響を与えているか、過去と現在を往来しつつ、変化と残像を描きだしているのである。そしてこういった描写をとおして、バイオテクノロジーは貧困緩和に寄与するか否か、という問いにたびたびもどるのである。以下では各章を概観したうえで、本書の特筆すべき点と批判を付け加えたい。

2. 各章の概要

1 章では、「緑の革命 (Green Revolution)」が終焉し、「遺伝子革命 (Gene Revolution)」時代の到来をみたインド、特にバンガロールを中心とするカルナータカ州の風景を描写することから始まる。資金と人的資源の投入規模が拡大したこの先端科学技術は、政府、民間、学術、市民団体を巻き込む複雑多岐なネットワークの中に存在している。序論となるこの章では、バイオテクノロジーが貧困緩和へ貢献するか否かという問題設定と、それを解きほぐすために政策決定のプロセスドキュメンテーションという方法を明言し、次章からの詳細な分析に入っていく準備として

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

いる。

続く 2 章から 6 章では、巧みに舞台背景を整えていく。まず 2 章のテーマは、「緑の革命」から「遺伝子革命」への移行による変化と不変要素である。そこでみられた変化とは、①食糧確保のための政策から、生産コスト削減と国際的競争力のある農作物生産のための農業政策、②中央政府、政府系列政策研究所、テクノクラート主導の政策決定から、多国籍企業を中心とする民間の利害関係者の参加、そして③そういった新たな利害関係者が作る利益集団の権力の拡大、の 3 点に集約される。こういった政策目標の変化・政策決定の参加者と力関係の変化がみられる一方で「緑の革命」期、「遺伝子革命」期と一貫して残るものもある。それは先端科学技術によって導かれる開発および近代という象徴であり、このイメージ像は時間を越えて常に政策決定を支える柱となっているのであった。

3 章では、カルナータカ州とバンガロールを中心に、バイオテクノロジー時代の科学政策の変化、特にテクノクラシーの性質の変化に着目する。バンガロールは 1990 年代、IT 産業が急速に発展し、研究設備、教育機関から高級住居までインフラを整えたハイテク・シティとなった。その後、IT 業界の国際競争力が低迷すると、既存のインフラ整備に見合う継承者としてバイオテクノロジー産業が台頭してくる。しかしバイオテクノロジーは IT 以上に高度な専門性と学問領域を横断したネットワークを必要とし、また技術もめまぐるしく変化するため、政府の能力のみでは管理しきれない。こうして、バイオテクノロ

ジー産業への移行によって、資金力、技術力を併せもつ国内企業や多国籍企業が次第に頭角を現し、政策決定の舞台においてもその影響力を増大していくのである。

4 章では、バンガロールにある農業大学の UAS (University of Agricultural Science) と政府系科学研究所である IISc (Indian Institute of Science) を事例にあげ、より具体的にバイオテクノロジーという科学の特徴を記述している。UAS, IISc ともバイオテクノロジー研究開発にかかる膨大な費用、人的資源、国境を越えた実験室間、研究室間のネットワークの必要性、そして特許にかかる複雑高度な手続きと費用を手持ちのキャパシティではまかない切れない。結局、UAS は積極的に、そして IISc は半ば消極的に、民間企業と提携する方向に流れていくのであった。

前章で研究部門を事例に使った著者は、5 章では、新規ベンチャー企業、大手ローカル企業、多国籍企業という三形態の企業を事例に、バイオテクノロジーの科学技術としての体質を描こうと試みている。そこで浮き彫りになるのは、コスト——研究開発、知的所有権、特許、ライセンス取得——の増大化により、新規ベンチャー企業や大手ローカル企業は、徐々に多国籍企業に吸収されていくという図式である。同時にこういったコストの肥大化は、ビジネス存続のためにより利潤追求型の研究開発へと企業戦略を誘発する。そして、少なくとも費用対効果をあげることに躍起になるバイオテクノロジー産業にとって、貧困緩和は、宣伝文句とは裏腹に、経営目的からは遠のいているのである。

それではこういったバイオテクノロジー時代において、誰が本当の政策決定者なのだろうか。6章では、政策現場における利害関係者の分析に分け入っていく。カルナータカ州でその鍵を握るのは、ヴィジョン・グループと呼ばれる技術諮問委員会である。これは、多国籍企業、国内企業、科学者、そしてインド産業連合(The Confederation of Indian Industry)の代表者から構成されたものである。これらの代表者は、それぞれが特定のグローバルな研究開発機関とのリンク、資本フロー関係の網の目に属し、それぞれの利害を目的とする力学に引っ張られる。明らかに技術諮問委員会という政治場面では、貧困緩和は広告的な標語以上の意味をもたない。しかし、彼らの意向だけが、常に政策決定に反映されるわけでもない。「貧困緩和」が政治舞台の表に出るときがある。選挙期間である。選挙立候補者たちは、人口の大半を占める農民や貧困層へのアピール合戦にかりきりになり、推進中のバイオテクノロジー政策がいかに貧困層にとって有益か声高に叫ばなくてはならない。先端技術を取り巻く政策決定の舞台は、技術諮問委員会に代表されるエリート層と貧困層の中で絡み合う、きわめて政治的な問題なのである。

1章から6章までに整理された背景を踏まえて、7章では、2002年に最初にインド政府によって商業利用の認可が下りたGMOである、BTコットンを例に規制基準がどのように実践されているかを描きだす。そこで明らかにしたことは、合理的かつ科学的に策定されたはずの規制ガイドラインは、実際の現場

では政治的道具になってしまうという現実である。

高度な科学技術の認可手続きには、個別の事例にそって膨大なデータおよびドキュメントの提示、フィールド試験とその専門的な評価が必要とされる。それに費やされる時間と費用の縮小のためには、各ステージでの政治的交渉、駆け引きがものをいう。誰が、どの分野の専門家が委員か、そして最終的な判断を下す鍵となる人物は誰か、交渉、折衷、妥協、戦略が繰り返されるのである。

さらに不確実性、危険性が伴うバイオテクノロジーは、反対勢力との激しいやりとりも必然的に生むこととなる。続く8章では、ビジネス側と同様に、国際的ネットワークを強めた反対勢力の内情に足を踏み入れる。市民団体は精力的に反遺伝子組み換え農作物運動を展開するものの、反対勢力間での理念の相違に加え、GMO以上に説得力をもつ代替案が出せずに、議論は泥沼化するばかりであった。

最終章となる9章ではこれまでの議論を整理したうえで、本書を通じて著者が追求してきた問いに最終的な解答を与える。つまりそれは、バイオテクノロジーはいまやきわめて政治的問題であること、そして、少なくとも現代カルナータカ州においては、そのスローガンにあるように貧困緩和に寄与しているとはいえない、という2点である。

3. 本書の特筆点と批判点

以上のように、本書は多くの人が漠然と懐疑的に考えている、貧困緩和に寄与する

GMO という標語に明確な判断を下している。しかし、それは本質的、絶対的な裁断ではない。現代インド、特にカルナータカ州とバンガロールがもつ状況設定の中での限定的なものなのである。これは、著者が行なった豊富な聞き取り調査と多面的分析方法という着案がうまくかみ合い、導きだせた答えであろう。また、欧米を中心とした先進諸国の科学技術政策分析が主流な科学技術論の先行研究にあって、インドを舞台に設定したことも、特筆すべきことである。

しかし、次の 2 点に関して若干の批判およびコメントを加えたい。1 点目は、「インドの特有性」についてである。著者は、BT コotton の事例から、科学的、合理的、危機回避重視型で作られた先端技術の規制枠は複雑なインド社会には当てはまらないと述べている (p.336)。この欧米型の規制が事例において機能しなかった理由を「インドの特有性」と帰結しているのである。にもかかわら

ず、インドがもつ生命倫理観や宗教性といった社会・環境設定 (Settings) には触れる程度でしかなく、分析は政治的側面に集中しがちであり、やや説得力に欠けるように思われる。今ひとつは、バイオテクノロジー論争におけるイメージ合戦とその道具を分析枠に積極的に取り入れなかったことである。本文に何度か登場する広告、特に IT 産業が発達したバンガロールにおいてウェブなどは、賛成派、反対派両者にとって重要な政治道具である。こういった道具も兼ねあわせて、分析対象にすればハイテク・シティであるバンガロールを舞台とした先端技術論争をより鮮明に描けたらろうと考える。

とはいえ、本書は世界中で論争を巻き起こしている GMO を題材に、現代インドという舞台における政策駆け引きの葛藤を見事に描きだした成功例であり、科学技術政策に関心のある読者から現代インドの地域研究者まで広く勧められる好著である。